

(試し読み版)

お隣のやたら色っぽいお兄さんと
おもちゃえっちしてセフレになったと
思ってたら、本命で恋人になった件

からあげのみこ

一章

「お願いします。通してください」

柏木紬（かしわぎつむぎ）はアパートの階段で懇願していた。相手は猫。名前はニャンギラス。

その怪獣じみた名に恥じない巨体のオスで、ペット禁止のアパートにも関わらず平然と居座っているキジトラ猫だ。

アレルギーこそないが、猫が苦手な紬にとって彼の存在は立派な脅威だった。

階段の真ん中に陣取られてしまったのは、もう部屋に帰れない。新卒で入社した会社を辞め、節約のために引っ越してきたこのボロアパートは、家賃が安いだけあっていろいろとすこし治安が悪い。

ちょうどその時、住人の一人が違法改造バイクで帰ってきて、けたたましいエンジン音が壁を震わせた。

「本当をお願いしますから——ひあっ!？」

気まぐれに体勢を変えたニャンギラスの尻尾がばさりと動いた瞬間、紬は反射的に肩をすくめた。

その様子を、背後から短く息をもらして笑う声が見下ろしていた。

反射的に振り返ると、そこに長身の青年が立っていた。

細身だが、無駄のない均整の取れた体つき。

髪は不精しているのか、後ろでヘアゴムで無造作にまとめられている。気怠げな雰囲気なのに、それが妙に似合ってしまう甘い顔立ち。

捲ったシャツの袖口から、タトゥーがのぞいている。黒い線が

皮膚の上を流れ、光を吸うように揺れていた。

「え……高遠さん？」

思わず名前がこぼれた。

青年は軽く片眉を上げて、柔らかく笑う。

「柏木ちゃん、こんばんは」

そこにいたのは、紬がアルバイトしているカフェの常連——高遠藍生（たかとうあおい）だった。

「猫、苦手なんだ」

それだけ言うと、屈んでニャンギラスを軽々と持ち上げた。太い縞の尻尾がだらんと垂れて、気の抜けた声でナーと鳴く。

「どうぞ」

紬の足元を空けるように、彼はゆるく手を差し出した。

「……あ、ありがとうございます」

なぜ彼がここにいるのか、聞きたい言葉が喉の奥でつかえる。けれど、それより先に脅威が取り除かれたことへの安堵が勝った。

逃げるように階段を上がり、自分の部屋の前に立つ。

胸の鼓動が、まだ少し速い。

落ち着けと自分に言い聞かせて深く息を吸う。

そのとき、郵便受けに差し込まれた一枚の葉書が目に入り、血の気がすつと引いた。

差出人はクレジットカード会社。見るまでもなく、督促状だった。

先月、学生アルバイトたちが夏休みに入ってシフトを増やしたのに甘えて、自分は資格試験の勉強を理由に勤務を減らした。そのツケが、こうして現実になっている。

まさか本当に残高が足りなくなっているなんて。昔から計画性がない自覚はあった。だがまさか社会人になつてもこんなことをやらかすとは。

紬は葉書を手にしたまま、ドアの前で立ち尽くした。

背後を、何事もなかったかのように藍生が通り過ぎていく。

ポケットからキーケースを取り出し、勝手知ったる様子で隣の部屋のドアを開けた。

驚いて顔を上げる紬に、彼は軽い調子で振り向く。

「柏木ちゃん、やっぱ知らなかったんだ」

「え……？」

「俺ら、お隣りさんだよ」

「ええっ、いつから!？」

「最初から」

藍生は笑って肩をすくめた。

「学生の頃から俺はずっとここ。もう十年になる——といっても、俺はたまにしかここに戻らないけど」

言葉を失った紬の指先から、葉書がひらりと落ちた。

制止するより早く、藍生がそれを拾い上げる。

「あやま」

軽い声。けれど、視線の端にほんの一瞬、困ったような笑みが浮かんだ。何が書かれているか、すぐに察したらしい。

「入り用だね」

そう言って葉書を返すと、彼はポケットに片手を突っ込んだまま、ふと思いついたように言葉を続けた。

「そうだ、柏木ちゃん——高額バイト、しない？」

「えっ？」

唐突すぎて、声が裏返る。

藍生はにっこりと笑った。笑顔を信用していいのかわからない。けれど彼が示した数字に理性よりも反射が勝った。

それだけあれば滞納を払える。電気も止まらず、カードも生き残る。

紬はかすれた声で言った。

「……やります」

藍生は、カフェ・ハマルメロの常連客だ。

それも「常連」という言葉では足りないほどの特別扱いを受けている。ランチに姿を見せなければ、マスターが気を利かせて従業員に弁当を持たせる——そんな客だ。「作業に入ると、食うのも

忘れるからな。困った子だよ」とマスターは笑っていた。

どうやら昔から家族ぐるみの付き合いらしい。

紬も何度か、頼まれてアトリエにランチを届けたことがある。ガレージを改装したその空間は、昼でも少し薄暗く、油絵の具と溶剤の匂いが少し混じっていた。

中央に据えられた巨大なキャンバスは、いつ見ても真っ白のまま。描きかけの跡すらないその白が、かえって印象的だった。

廃材を組み合わせて作ったようなデスクで、藍生はノートパソコンに向かい、デザインの仕事をしていた。

光を背に受け、静かな集中の中でモニターを見つめる姿は、妙に印象に残っていた。射抜くような視線。

そのときは声をかけることもできず、ただ見入ってしまった。

——そしていま、その視線が自分に向けられている。

藍生はタトゥーの入った右腕で木炭を握り、イーゼルに立てかけた紙の上に黒い線を刻む。黒い線が紙の上で生まれ、呼吸のようにながらって行く。

場所は、あのアトリエではない。ここはボロアパートの六畳間。絨の部屋と間取りこそ同じだが、住んだ時間の差なのか、藍生の部屋はまるで別世界のようだった。

白々しいほどに明るい電灯が、絨の肌を照らす。壁の薄い部屋の中で、絨は息を潜めた。自分の鼓動と浅い呼吸、そして木炭が紙を擦る音だけが、静かに響いている。

息をするたび、視線が触れるような気がした。

見られている——それだけが、今この空間の現実だった。

（これ、わたしまたやっちゃってる……？）

九月になっても終わっていない夏休みの宿題。勢いで会社を辞

めたこと。思い出したくもない失敗の数々が頭の中をぐるぐる回る。

服は部屋の隅に、きちんと畳んで置かれていた。下着まで揃えてここまで丁寧に畳むなんて、洗濯物に対してすらしたことがない。

紬はいま、全裸で隣人の部屋にいる。

——じゃあ、脱いで。

部屋に入るなり藍生にそう言われた。さすがに耳を疑ったが、彼が無言でイーゼルを引っ張り出し、木炭を削って画材を並べていく様子を見て、少なくともそういう類の話ではないとわかった。ヌードモデルというやつだろう。

言葉としては知っていた。美術の授業や映画で見たこともある。けれど、まさか自分がその裸を描かれる側になる日が来るとは思

わなかった。

それでも、他に選択肢はなかった。

督促の支払い。現実。

（どうしようも、なかったんだよね……たぶん）

紬はそう自分に言い聞かせ、白い光の下で、ただベッドに寝転がっていた。

——いい、そのまま。

低く落ち着いた声にいわれた通り、紬は動けないでいる。ただいつまでも姿勢を保つには無理があり、背筋も腕もじわじわと痛くなってくる。それでも、視線を感じるたびに、筋肉が勝手に「逃げな」と命令してくる。

もちろん、身体を隠すことは許されない。

明るい照明の下、肌の上を光が滑っていくたびに、自分が「見

られている」という現実が直に突き刺さる。

喉の奥がじんわり熱くなつた。外気に晒された乳首は主張するようにツンと勃っている。目が潤むのは、羞恥か、疲労か、それとも――。

どれくらい時間が経つたのか、もうわからなかった。この部屋には時計がない。

木炭のこすれる音がとまって、代わりに自分の呼吸だけになる。

「――よし」

短い言葉に、張り詰めていた糸がふっと緩んだ。魔法が解けたように、身体感覚が少しずつ戻ってくる。硬直していた指が震え、シーツの感触がやけに生々しい。

藍生は木炭で汚れた指先を布で拭いながら、ゆっくりとこちらへ歩み寄る。その距離が縮まるたびに、また心臓が跳ねた。

「ごめん、疲れたでしょ？」

穏やかな声だった。

「……は、はい」

反射的に答え、慌てて上半身を起こして腕で身体を隠す。

藍生はそれを咎めもせず、ただ息を整えるように静かにいう。
「大丈夫だった？」

大丈夫かどうかと聞かれたら、たぶん大丈夫ではない。まだ胸の鼓動も、体の奥の熱も落ち着かない。けれど、そのことを言葉にするのがためらわれた。

藍生の指先が、頬の近くまで伸びてくる。

紬は息を飲んだ。触れるか触れないか、その境で空気が止まる。何も起きないのに、なぜか世界の音が遠ざかっていく。

熱を帯びた指先が頬に触れる。指がゆっくりと動いて、輪郭を

なぞる。

まるで触覚で紬の形を確かめているようだった。

息が少し触れる距離。何も言えず、ただその温度の中に留まる。

「ちゅーしょ？」

問いかけというより、息の触れる距離で零れた呟きだった。

目が合ったまま、動けなくなる。空気が少し熱い。拒む理由なんて、もう残っていない。唇と唇が触れる、息が混ざり合う。

「——ん、ふう♡」

舌先で唇をなぞられる。促されるまま唇をゆるく開くと、柔らかな舌がゆっくりと入り込み、絡み合う。

境目が曖昧になっていく感覚に、もう抗うことさえできなかった。

藍生の呼吸が頬をかすめる。触れられている場所も、そうでな

い場所も、すべてが彼の支配下にあるようで——ただ、飲み込まれていく。

「……ねえ、いい？」

その声は低く、甘く、かすかに笑っていた。問いかけというより、すでに答えを知っている人の声音。ただ小さく頷いて、応えた。

軽く押された背がベッドに沈む。藍生はおもむろにシャツの裾へ指をかけた。ゆつくりと布を引き上げるたび、光の中で輪郭がほどけていく。逆光に浮かぶ肌は薄く影をまとい、細いのに研ぎ澄まれた線を描いていた。息をするのも忘れて、その動きだけを見つめていた。

「ごめん。電気、眩しかったね」

そういつて電灯から伸びた紐を引っ張り、照明を落とす。常夜

灯の淡い明かりだけが部屋を照らした。藍生の影がすぐ上に落ちる。頬に触れた唇は驚くほど優しい。

「ねえ、柏木ちゃん。下の名前なに？」

「紬、です」

「紬ちゃんね。可愛い名前」

名前とはいえ可愛いといわれて少し嬉しい。

「俺は藍生」

「えっと、藍生……さん」

「なあに？」

目を細めて髪を撫でられ、唇が首筋に落ちた。

「——っ♡」

唇が鎖骨をなぞり、胸元、鳩尾、脇腹へとゆっくり下りていく。そのたびに肌の奥で微かな震えが走った。

臍のあたりで指先が止まり、円を描くように撫でられる。堪らず息が漏れ、声になった。

「やだ……くすぐりたい」

藍生が顔を上げ、くすぐすと笑う。

「絀ちゃんは柔らかいね」

「え？」

「こんな、皮膚の薄いところ触られて——嫌がるんじゃない、くすぐりたいなんて」

藍生の言葉は、揶揄でもあり、観察でもあった。凶星だった。絀は自分に警戒心が薄いところがあるとわかっている。

「わたしに、ちゃんとした警戒心があつたら、ここにいません」

「それもそうだね。刺青入った怪しい男の家になんて入っちゃダメだよ」

言葉は穏やかで、皮肉の色もない。ただ静かに事実を並べているだけ。

確かにそうだ。今回も、完全にやっちゃっている。

それなのに、藍生の声は心地よかった。押し倒されても、怖くない。彼の息が近づくと、むしろ力が抜けていく。

「——ひゃっ!?!♡」

内腿に伸びた指先に秘裂を撫であげられた。にちゅ♡と恥ずかしい水音が鳴りすでに昂っていることを暴かれる。

「紬ちゃん、これキスで濡れたの、それとも俺に描かれてるときから？」

後者、だった。あんなにも熱のこもった視線に裸体を晒して、平静でいられるはずがない。

「ねえ——どっち？」

ただ、そのことを正直にいうのは、どうしてもできなかった。恥ずかしさが先に立って、言葉にならない。紬は問いかけに顔を赤くし、ただ小さく首を振るしかなかった。

「……藍生さんは意地悪です」

「まあ、どっちでも紬ちゃんが感じてくれてるってわかって嬉しいよ」

笑うようにいう。その余裕が少し恨めしい。

「そうだ——こういうの興味ある？」

その手にはちいさめの箱があった。ベッドサイドに無造作に置かれていたダンボールから取り出された厚みのない薄い箱。ちよっとお高めのチョコレートでも入っていそうなデザインだが、そのポップなショッピングピンクの英字に釘付けになる。

「……ピンク、ローター？」

「そう、ローター。使ったことある？」

「なっ、ないです！　そんなの……っ」

「使ってみる？」

さらに顔を赤くする紬を余所に、藍生はパッケージを開ける。

「ちゃんと電池もついてるね」

興味がないわけじゃなかった。むしろ視線はそこから離れない。けれど、自分から求めればはしたない女だと思われる気がして、いえない。そういうことは、これまでの恋人にも一度だって口に出来なかった。

恋人——その言葉が胸の奥を刺す。

自分では恋人のつもりだった会社の同期にとって、紬はただの“ひとり”にすぎなかった。遊び相手の中の一人。職場を去った理由の一つでもある苦い記憶。

だからこそ思う。藍生にとって、自分はいつたいなんなのか。（ベッド、ダブルベッドだし。おもちゃが普通に出てくるし……）どう考えても手慣れている。妙に落ち着いた仕草も、余裕の笑い方も。

きつと自分との関係も、深い意味なんてない。

気まぐれのワンナイト。せいぜいセフレ。そう決めつけた方が楽だった。

期待さえしなければ、また傷つかずに済むから。

だからこそ——少しでも気が緩む。藍生の空気に身を任せて、流されてしまってもいいのかもしれない。

ダイヤル式のスイッチでピンクの円筒パーツがヴーッと高い音とともに振動を始めた。それをコードを摘んで垂らして首筋に当てて、刺激の強さを確認させられる。

「やつ♡首だめえ♡♡」

「ほんと、くすぐったがりだね」

首から離されたローターはローターは胸の谷間で肌をくすぐっている。

これでもっと敏感なところに、触れられたらどうなるのだろう。押し付けられたら？　そう考えて、身体が期待で熱を持つのがわかった。

それを見透かすようにあと一步、敏感な皮膚には触れてくれない。ローターは胸の淡い縁取りに沿って円を描いた。

尖端はすでに待ちわびるように充血して、じんじんしている。焦れたい。肌を離れたそれがふいに直に乳首に触れ甲高い声が漏れた。

「ん……ふっ♡ふあっ♡——アッ♡ああ♡♡」

反射的に身を振るが、逃げられない。ローターが乳首に押し付けられた。根元を抉るようにぐりぐりと緩急をつけて、触れられる。

「ひゃっ♡♡ひゃだっ♡♡それっ♡♡♡♡」

「気持ちいいね」

落ち着いた声が耳に落ちる。

反対側の乳首が爪先でカリカリとそつとくすぐられる。甘い快感が一度に押し寄せ、身体がびくりと大きく跳ねる。

「……ごめん、強かった？」

「だ、だいじょ……ぶ、で、す♡」

荒い息のまま、喉の奥でなんとか返事だけ絞り出す。強すぎたわけじゃない。むしろ、気持ちよすぎて言葉が追い付かない。

「乳首だけでも、甘イキできそうだね」

その囁きが耳に届いた瞬間、ぼんやり溶けかけていた思考がまた震えた。

陶然とした余韻の中で、身体だけが素直に反応する。触れられた場所がじんわり熱を帯びて、もう一度呼吸が乱れた。

指でそつと割られたそこが、空気に触れた瞬間に震えた。愛液に濡れた粘膜がてらてらと光り、中心の突起は完全に勃ち上がっている。

「ビンビンだね」

「やあっ♡……い、いわないで♡」

熱のこもった視線がそこへ吸い寄せられる。見られているだけで、ぞくりと背筋が痺れた。

ローターが触れる前から、弓なりに身体が反っていく。逃げたくて動くわけじゃなく、刺激の予感だけで勝手に。





いさく跳ねるように脈を打ったび、びく強すぎて、逃がすことなんてできない。

藍生の手は揺るがず、ローターで一点をぶるぶると震わせる。

敏感な部分のさらに最も敏感ところに触れられる。そのたび、

「ほら、反応可愛いよ」

囁きすら刺激になって、身体がまた跳ねた。ローターで震わせ

「アツ♡ひ♡ひ♡あ♡つ♡♡」

「……もう、いく？」

藍生の声が耳の奥で揺れる。

答えようとした瞬間、ローターの角度がほんの少しだけ変わった。

「ブッ!?♡あ、あっ~~~~♡♡♡」

逃げ場のない刺激が芯を貫いて、身体がびくんと反った。

足先まで電気みたいにびりびりと走り抜け、視界が白く瞬く。息が止まったまま、奥の奥までぎゅうつと縮む。絶頂の波が抜けていくと、全身がだらりと力を失った。

痙攣がゆっくり収まっていく中、細の呼吸だけがまだ荒かった。汗で張り付いた前髪を、藍生の指がそつと梳いた。優しく触られるだけで、余韻で敏感な身体がふるりと震える。

藍生が額にそつと口づけた。熱が残る肌に労るようなキスが落

ちる。紬がかすかに目を上げると、藍生は少し笑っていた。視線は優しいのに、なにか底の深い感情が混ざっている。

「快感にやわらかくて、ほんと好み」

撫でる指先も、声も、全部が紬をとろけさせるようだった。反論する余裕なんてどこにもなくて、ただ息を震わせるしかできない。

「見た目こんなんだけど、ちゃんとするから」

自嘲めいた息と一緒に、藍生はゴムの封を静かに切った。

紬はまだ絶頂の余韻が抜けきらず、太腿がかすかに震えている。その奥、ひくひくと甘く痙攣している粘膜へ、亀頭がそつと押し当てられた。

「……っ、ん♡あ、ん……♡♡」

擦り上げられた瞬間、紬が短く喘ぐ。触れただけで逃げ場のな

い刺激が走り、腰がまた浮きそうになる。藍生はその反応を確かめるように、とろりと濡れたそこをゆつくりとなぞった。

甘さにとろけるような声が、紬の喉から零れていく。

亀頭でやわらかい粘膜をなぞられるたび、紬の吐息が細く漏れる。

余韻で敏感になっていくせいで、触れたところから熱がじわりと広がっていく。

藍生の腰がわずかに近づいた。けれど、まだ挿れない。ほんのわずかの距離で、動きがふっと止まる。

「……紬ちゃん」

低く呼ばれただけで心臓が跳ねた。藍生の呼吸が近い。

押し当てられた先端が、濡れた入口をやわらかく押し広げようとする。挿るでも、離れるでもないその宙ぶらりんな間が、かえ

って身体をきゅつとすばませた。

「力、抜いて……」

囁きとともに、指が紬の腰を優しく撫でる。怖さじゃない。期待に似た震えが全身を走った。

入る直前の沈黙。その一瞬だけが、甘くて、長い。

藍生の指先が、紬の腰を包んだ。その温度だけで身体がゆるむ。押し当てられていた先端が、ゆっくりと角度を変えた。湿った入口を、今度は本気で押し広げようとする動き。

「挿れるよ」

紬の喉がきゅつと鳴った。足が勝手に震える。

次の瞬間、どろどろに濡れたそこが静かに押しわけられた。すべり込む感覚に鋭さはなくただ熱い。身体の奥にゆっくりとその形が満ちていく。

「っ♡……あ……っ♡」

紬の声が勝手に漏れる。

押し広げられる甘い痛みと、満たされていく一体感が混ざりあった。

奥まで満たされたまま、藍生の動きはまだ止まっていた。

紬の呼吸が整うのを待つように、指先が腰に添えられたまま動かない。

その静けさの中で、藍生がゆっくり上体を伏せてきた。

影が頬に落ち、唇がすぐそばに降りてくる。

「紬ちゃん」

名前を呼ばただけで胸が震えた。唇が重なる。柔らかく――けれど逃がさない、深いキス。口の中で舌が触れるたび、挿れられているところまでじんわり熱が伝わっていく。

絶頂の余韻がまだ残る身体では、キスひとつで溶けるように力が抜けた。

藍生が唇を離し、笑うように囁く。

「キスすると、とろんとなるの……ほんと、いいね」

言われた瞬間、胸の奥がきゅつと締まって紂は息をのみ込んだ。照れや羞恥よりずっと深いところが震えて、藍生の名前を呼びそうになる。

そのまま、またキスが落ちてきた。触れるだけじゃない。舌を絡め、飲み込むみたいに深く、長い。

キスに夢中になっっているあいだに、藍生の腰がほんの少しだけ動いた。奥を確かめるようにゆっくりと押し込まれる。

「……っ、ん……っ♡」

声が勝手に漏れた。

藍生は唇を離さず、紬の頬を撫でながら、沈み込むようにまたそっと押し入ってくる。ゆっくり、ゆっくり。ピストンではなく、キスしながらとろけさせるための動きだけ。

紬はもう力が入らず、藍生に全部委ねるように背を反らした。深く触れ合うたび、喉の奥が甘く震える。藍生の唇が紬の口元をゆっくり離れ、代わりに片手が下腹へと滑っていった。

挿れられたまま、まだほとんど動き出していないはずなのに、触れられる前から身体が反応する。

指先が、陰核のすぐそばにそっと添えられた。押さえるでも、擦るでもない。ほんの軽く、位置を確認するだけの触れ方。それだけなのに、紬の息が止まった。

「力、抜いて。……大丈夫だから」

囁くような声の直後、藍生の腰がわずかに動いた。

押し出すでも突くでもなく、深さを確認するような、ゆっくりした前後の揺れその動きに合わせて――添えられた指に、紬の陰核がこすられる形になる。

「っ……あっ♡……やっ♡」

自分では求めているのに、動きのたびに敏感な粒が上下に擦れてしまう。藍生は指圧を変えず、ただ添えたその指を紬の動きに合わせて使っていた。

「ここ、触ってないのに……動くと勝手に擦れちゃうね」

低く笑う声が耳の奥を震わせる。

触れられているわけじゃないのに、腰が勝手に揺れてしまう。中をゆっくり満たして進む肉棒と、外側で細かくこすれてしまう甘さが重なる。

「……っ、あ……っ♡だめ……っ、感じ……ちゃ……♡♡」

「だめじゃないよ。紬ちゃんの身体が、こういうの好きナだけ」
藍生の腰がもう一度、浅く前後した。

そのたびに、添えられた指先に陰核が小さく押しつけられ、擦れる感覚がじんわりと脳を焼く。触られていないのに、触られている以上の快感が走る。

「……可愛い。押しつけてきてる」

囁かれた瞬間、紬の喉から甘い声が零れた。

藍生の腰の動きが、ゆっくりと——けれど確実に、深さと速度を増していく。

添えられた指の位置は変わらないまま、その指に紬の陰核が何度、何度、何度も擦れてしまう。

「っ……あ、あっ♡まっ……て……っ♡」

紬の声はもう言葉にならず、息が千切れそうに跳ねた。

藍生が押し出す角度が少し変わるだけで、内側の甘いところを擦られ、その動きに合わせて外が敏感に震える。

「だーめ、止めないよ」

声のあと、動きがさらに速くなった。浅い喘ぎがひっきりなしに溢れ、紬は腰を逃がそうとしても逃げられない。

中と外、両方から追い詰められるように快感が押し寄せる。

「やつ♡やつ……♡♡ひゃん……っ、あ……ああ♡♡」

触れられていないのに、擦れてしまう。藍生に合わせて動くたび、陰核が指に当たり、跳ね返され、また押しつけられる。

そのたび、紬は高い声で鳴いてしまう。

「……ほら、鳴いてる。かわいい」

耳元で囁かれ、涙で潤んだ瞳が勝手に藍生を探す。

触れられていないのに触れている以上で、ひくひくと締まり

続ける。

「ひゃ……っ♡やだ、声……っ、あっ、あっ♡♡」

「やだじゃないよ。もっと鳴いて」

藍生の声は静かで、余裕があつて、紬をさらに溶かしていく。腰がぶつかるリズムが上がり、紬の身体はベッドに押し付けられたまま跳ねるしかない。

「っ、あ……っ♡ひゃんっ♡♡あ、ああっ♡♡♡」

きゃんきゃん鳴かされるたび、身体の奥が快感に引きずられて、もう自分ではペースをつかめない。藍生の動きと指にすべて委ねるしかなくて、紬はただ甘い声を溢す。

「紬ちゃん……可愛すぎ」

その一言がまた奥を震わせて、紬の声がひらくように高くなつた。

逃げ場も、理性も、もうどこにもなかった。藍生の動きが、細の反応を読むようにわずかに深くなった。指先はまだ陰核のすぐそばに添えられたまま。そこに細の動きが押しつけられるたび、小さく震え、快感が弾ける。

「……細ちゃん、もう一回、くるね」

その言葉だけで奥がきゅん♡と縮んだ。ダメだ。もう逃げられる状態じゃない。

「っ……あっ♡ああ……っ♡♡」

腰がぶつかると、内部がぎゅっ♡と搾られる。

その動きに合わせて、陰核が添えられた指に必ず擦れてしまう。意図的じゃない。逃がそうとした動きが全部、快感に変換されてしまう。

「ほら……押しつけてる」

「ちが……っ♡違っ……あっ♡♡」

「可愛いよ。素直で」

藍生の声が低く沈む。その音だけで、身体の奥が震えた。涙がにじむのに、快感だけが膨らんでいく。

腰の動きが一段と鋭くなる。中の甘いところをまっすぐ撫で上げながら、外側の敏感な粒を何度も擦られた。

「っ……ひ……っ♡やっ……♡♡あ、ああ……っ♡♡♡♡」

紬の声が跳ねる。

喉が勝手に震えて、息がうまく吸えない。

「紬ちゃん……気持ちいいね」

「や……っ♡あっ、ああっ……♡♡」

藍生が紬の腰を抱えて引き寄せた。最奥まで押し込まれる。触れていないはずの指に陰核が擦れて、身体が大きく跳ねた。

「あ~~~~~~~~♡♡♡」

瞬間、視界が白く弾けた。

腰が砕けるような甘さが、芯から突き上げてくる。

内部が勝手にきゆうっ♡と強く締めまり、そのたびに藍生のモノが奥でどくどくと脈打つ。足が震えて、爪先まで痺れる。

「……一緒にイけたね」

藍生の声がどこか遠くに聞こえる。紬は答えられず、ただ震える息を吐く。痙攣が止まらない。奥が甘くひくひくして、身体が勝手に藍生に縋る。

「可愛かったよ。すごく」

その囁きだけで、余韻の中の身体がまたくたりと溶けた。